2　新しい学習方式のための予備実験
――漢字を学んでからかなへ

昭和26年からその翌年にかけて、私はすでに小学校の教師となる決意を固めていましたので、教師としての能力や教養を身につけるための努力（これは正直のところ大変なことでした。私は旧制高校の教員免許状を持っていましたので、高校と中学の一級免許状を無条件にもらえたのですが、小学校だけはどうにもなりま廿んでした。小学校は全教科を担当しなければなりません。ですから、絵の指導や音楽の指導もできなければならないのです。当時幼稚園児だった長男と、まだ満三歳にならない長女と、同じバイエルでピアノの練習を始めたのですが、最初は私が一番うまく弾けていましたが、間もなく追いつかれ、追い抜かれてしまったのにはがっかりしたものです。しかし、ともかくも昭和27年のうちに、小学校仮免許状をもらって、最低の準備だけはできました）をすると共に、小学校で行う実験の予備実験を考えました。そこで、昭和27年の４月早々、管下小学校の中で、信頼のできる、すでに一年生を何回か担任した経験を持つ、新一年生担任の先生を求めました。幸い、二つの学校から、それぞれ一名ずつ、都合二名の先生の快諾を得ることができ、いずれも、校長および校務主任の承諾を得て、次のことを実施してもらう約束ができました。

⑴　漢字書きした方がどう見てもやさしいと思われる言葉――例えば「山」や「川」――は、教科書ではかな書きされて提出されていても、最初から、漢字書きして指導する。

⑵　その指導の経過、および結果を、過去の経験と比較して、異なっていると思われる点や、特に気の付いた点を記録する。

この二つを実施してもらった結果、両名の先生から得た報告は、

⑴　漢字の方がかなよりも、児童が興味を持って学習すること。

⑵　従って、漢字の方がかなよりも、記憶し、学習しやすいように思われること。

⑶　漢字の混じった文の方が、かな文字ばかりの文よりも、読み方がすらすらと円滑であること。

⑷　従来のかな書き文の読みによくある「拾い読み」が目立って少なくなったこと。

等の明るい見通しのあるものでした。

なお、これと併行して、長男の峻に、明年小学校に入学するまでの一年間、漢字学習をさせ、どの程度習得できるか、またその場合の漢字の習得状況などを観察することを考えました。長男は、この年の正月、すでにかなの読みをカルタ遊びで習得していました。私は、漢字を最初から字源的に指導していきました。勿論、象形･指事･会意等のうちのやさしいものを、絵に結びつけて指導する、といった程度でした。主として、一年生の国語教科書に提出されている漢字から提出していったのですが、数字（「六、七、八、九」等の習得には、相当の時日を費したように思います）を除いたら、一年生が学ぶ漢字の全部

を習得するのに何日もかかりませんでした。それで、すぐに二年生の国語教科書に出ている漢字に移りましたが、特に計画的な指導でなかったため記録もないので、明確には言えませんが、二か月くらいの間に習得してしまったように記憶しています。こうして百数十字の漢字を習得しましたので、三年生の教科書を、物語を読むように与えました。子供は、ここで初めて、「イソップ物語」や「ガリバー旅行記」を読む機会を得たわけです。幸い、私の所には、各教科書会社から教科書がいろいろ来ていましたので、一冊を読み終れば、他の三年生の教科書を与えるというようにして、たくさんの物語を自由に読ませました。

この指導で気の付いたことは、子供が、初めから拾い読みを全然しなかったことです。まだ幼稚園の園児である子供が、三年生の教科書を、初めて読むのにも決して拾い読みをしないのです。いくつかの語句をまとめて読んでいくのです。この時、これは、漢字混り文から文章を読むことを始めたためだとは推測しましたが、その証明はそれから数年後になりました。

この指導におけるもう一つの収穫は、「新しい漢字」の効果的な現出方法の発見です。それは思いがけない所にありました。物語を読み始めたばかりの頃、よくあった新しい漢字の質問が、秋頃になるとまったくなくなってしまいましたので、私は、「さては質問が面倒くさくなったのだな」くらいに考えて、子供の読書を眺めておりました。その頃は、口を結んで、熱心に黙読するようになっていましたが、よく見ていると ページをめくるのがとても速いのです。それである日、子供に本を朗読させてみました。すらすらとよどみなく読んでいきます。教えていないはずの漢字も平気で、つかえずに読んでいきます。私は半ば驚きながら、子供に尋ねてみました。「起るっていう字、教わらないでよく読めたね」すると、「だってお父さん、『あらしが起りました』だろ。他に読みようがないよ」という返事です。いかにも、そんなこと当り前じゃあないか、と言いたげな顔なのです。私はその顔を見て、「新出漢字の提出は、この手に限るな」と思いました。翌年、私は一年生を担当した時、例えば、「長い」という字を教える時には、まず、「うさぎの耳は長いね」というような文にして、小黒板やカードに書いて、子供たちに見せました。こうすれば、「これは何々と読む字だよ」と教えるよりも、どんなに効果的か知れません。子供たちは進んで、クイズを解く楽しさでこの字を読み、そしてこの字を覚えてくれます。この方法の発見のヒントは、「だってお父さん、『あらしが起りました』だろう。他に読みようがないじゃあないか」という子供の返事にあったのです。

さて、このようにして半年もすると、三年生のどの教科書でも、三年生の児童が読むのと同等以上に読むようになりましたので、長男の実験はそれで打ち切ってしまいました。予備実験としてはもう十分、今はもう一年生の担任として実際に子供たちを指導する日を待つばかりだったのです。